

# エジプトとシリアの与党支持構造

## 中東地域の比較政治分析

浜中 新吾

『Asahi 中東マガジン』2011年10月17日掲載

頑健と考えられていたエジプトのムバーラク体制が18日間の民衆デモであっけなく崩壊したことは中東地域の実務家・中東研究者だけでなく、政治学者にも大きな問いを突きつけている。政治学者たちは中東諸国を「生存に成功した権威主義体制」とみなしていた。20世紀後半に南欧・南米・東欧・アフリカを覆った民主化の波は中東まで到達しなかったからである<sup>1</sup>。

一方、シリアのアサド体制は3月半ば以降各地で発生する反体制デモにも関わらず、盤石であり続けている。政治学では権威主義体制を特徴付ける主体に着目して軍部支配、一党支配、個人支配に分類し、体制持続の強度を研究しており、エジプトとシリアはしばしば同じ類型とされてきた。それは軍部・党・個人の特徴を全て兼ね備えたハイブリッド（混合）型権威主義体制である。ハイブリッド型の権威主義体制は他の類型と比較して強靱だと考えられていたが、「アラブの春」によって説明されるべきパズルとなった。すなわち「学問的に同じハイブリッド型権威主義体制とされたエジプトとシリア両体制の命運を分かちつものは何だったのか」という問いである。

「アラブの春」以降のエジプトとシリアの政治的プロセスについては既にいくつかのレポートで報告されており、それらは見比べることで明らかにできる事実は多いものと思われる。政治指導者の年齢、国民に対する抑圧の強さ、監視の厳しさ、経済自由化の浸透度、エスニシティ亀裂の有無、反体制運動の組織化の程度など両国の違いは明白である。しかしながら外部からの観察によって、どの要因がどのようにどの程度作用したのかについて、特定し説明することは必ずしも容易なことではない。

そこで本レポートでは、既存の議論であまり注目されることのなかった一般国民の与党支持態度とその構造に着目する。筆者と青山弘之（東京外国語大准教授）、高岡豊（中東調査会研究員）は2008年から研究プロジェクトを結成し、中東諸国で世論調査を実施している。2007年にシリアで、2008年にエジプトで同じ質問項目を含んだ調査を行ったので、条件を統制した上で与党支持態度の比較を行うことができる<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> この点については『文明の衝突』で一世を風靡したサミュエル・ハンチントンの前著『第三の波』に詳しい。

<sup>2</sup> この研究プロジェクトに関しては「シリアにおける全国世論調査」(<http://www.econ.hit-u.ac.jp/~areastd/syria.htm>)および「エジプト・アラブ共和国における全国世論調査」([1](https://cmeps-</a></p></div><div data-bbox=)

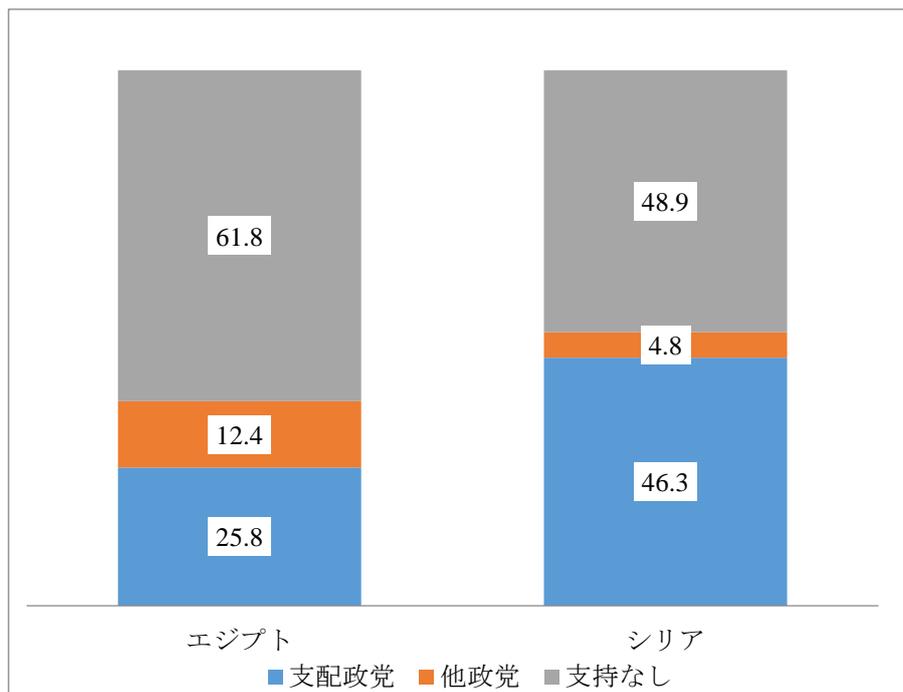


図1：エジプト・シリアの政党支持（単位%）

図1より、エジプト国民民主党は国民の四分の一程度の支持しか得られていないこと、そしてシリア・バアス党は国民の半数近い支持を得ていることが分かる。さらにエジプトの他政党は政府と対立する野党であるのに対し、シリアの他政党とバアス党は与党連合「進歩国民戦線」を形成している。よってエジプト国民の一割強が明確な反体制派であったこと、およびシリア国民の過半数が体制を支持していたと考えられる。このことは反体制デモへの参加者数の違いとなって現れたのではないだろうか。

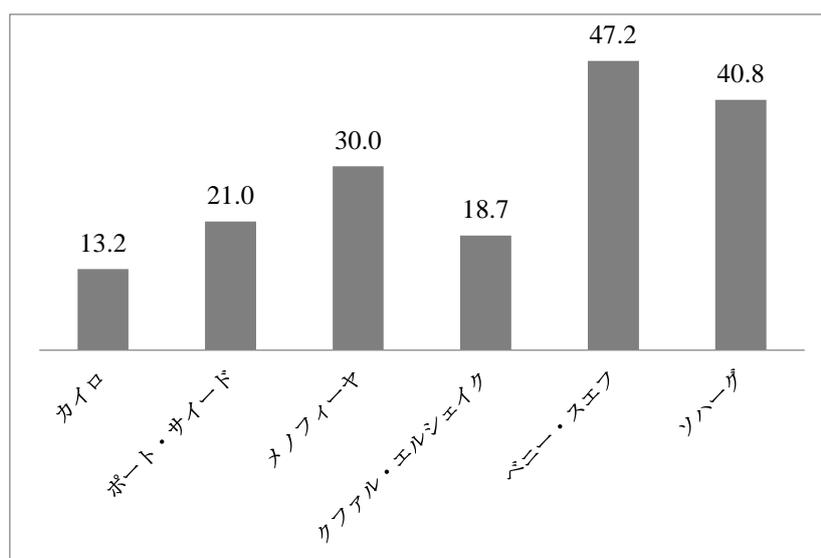


図2：調査対象地域別にみた国民民主党の支持率分布(単位%)

[j.net/projects/namatiya1/products](http://j.net/projects/namatiya1/products)も併せてご覧いただきたい。

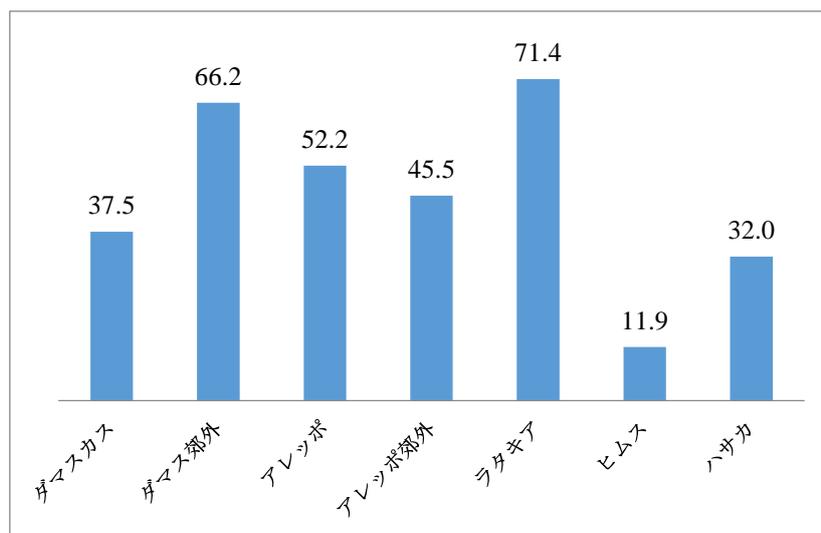


図3：調査対象地域別にみたバアス党の支持率分布(単位%)

図2は調査地別に見た国民民主党の支持率、図3は調査地別に見たバアス党の支持率を表している。カイロやポート・サイドといった都市部において国民民主党の支持率が低く、上エジプトでは相対的に高い支持を獲得できていることが図2より分かる。これは地方在住の有権者は国民民主党に投票する傾向が強いという先行研究の結果と一致している。また図3からはアサド家の出身地であるラクアにおいてバアス党の支持率が高く、トルコ・イラクと国境を接するハサカやイラク・ヨルダンと国境を接するヒムスにおいて支持されていない傾向を読み取ることができる。ハサカはクルド問題を抱えている地域であり、ヒムスはかつてムスリム同胞団による反政府武装闘争の舞台となった過去がある。

ではこの与党支持態度はいかなる要因によって説明されるのであろうか。

エジプトとシリア政治研究および一般的な途上国政治研究によれば、政党支持は①パトロネージ（利益誘導と地域有力者との繋がり）、②社会問題の認識、③政治情報の経路、④安定と自由に関する価値観、⑤共鳴するイデオロギーといった要因から説明される。各要因を構成する個別の質問項目については表1を見ていただきたい。なお個別の質問項目がスラッシュ(/)で二つに分かれているものは、右側がエジプトにおける質問であり、左側がシリアにおける質問である。

表1の○は計量分析の結果、説明力があると判定されたことを意味し、空白は説明力がないと判定されたことを表す。例えば①パトロネージについて言えば、エジプトでもシリアでも国営部門に就業している人はそうでない人に比べて与党を支持することを意味する。しかし名望家・地域の権力者に情報を依存しているシリア人はそうでない人に比べて与党を支持しているが、エジプト人の場合だとその関係が成り立たない。④安定と自由に関する価値観の場合だと、「政治的安定は自由より重要」と考えるシリア人はバアス党を支持するが、同じ考えのエジプト人は必ずしも国民民主党を支持するわけではない。

支持の要因		エジプト	シリア
①パトロネージ	国営部門の就業	○	○
	名望家・地域の権力者への情報依存		○
	人民議会議員、地元政治家への情報依		
②社会問題の認識	汚職は深刻な問題		
	格差是正の機会がない／格差問題解		○
	パン価格や補助金の話／技術開発よ		
③政治情報の経路	政府への情報依存	○	○
	自国の地上波テレビ放送の利用頻度		
	他のアラブ諸国の衛星テレビ放送の		
	インターネットの利用頻度		
④安定と自由	政治的安定は自由より重要		○
⑤イデオロギー	アラブ民族主義		○
	エジプト国民主義／シリア国民主義		○
	イスラーム主義		○

表 1：与党支持態度の説明要因

エジプトとシリアの世論調査データをそれぞれ計量分析にかけると、国民民主党への支持は利益誘導と政治情報の経路という 2 つの要因でしか説明できないのに対し、バアス党への支持は上記 5 つの要因全部で説明されることが明らかになった。言い換えると、バアス党への支持は利益誘導・政治情報経路・社会経済問題の認識・安定と自由に対する価値観・イデオロギーという 5 つの説明要因で構造化されていたのに対し、国民民主党への支持構造は既に腐食して強度を失っていたのである<sup>3</sup>。〈注 3〉

「学問的に同じ類型とされたエジプトとシリア両体制の命運を分かつものは何だったのか」という問いに答えるならば次のようになるだろう。すなわち「エジプト与党の支持構造は既に空洞化していたのに対し、シリア与党の支持構造は盤石だった。それゆえエジプトにおける一斉示威行動という集合行為の発露はタイミングの問題だった」と明確に答えておきたい。

(c) 浜中新吾

<sup>3</sup> 本レポートで紹介した計量分析の詳細については『アジア経済』第 52 巻 12 号に掲載予定の論文を参照していただきたい。